

学社協働がまちづくりの過程に及ぼす影響

ー岩手県岩手町における石彫まちづくりの事例を通してー

柴田 彩千子

(日本女子大学大学院)

【要旨】

本研究は、石の彫刻という芸術文化を通して、文化のまちづくりを実施している、岩手町国際石彫シンポジウム活動（岩手県）に着目し、このシンポジウム期間中に行われた学社協働事業（彫刻教室）のケーススタディを行ったものである。この事業が開催されるまでのプロセスと、彫刻教室そのものを分析することにより、各主体（シンポジウム実行委員会、学校、保護者、彫刻家）が彫刻教室に対して持っていた意図と各々の背景を明らかにしたうえで、彫刻教室を学社協働事業として実施する意義を考察した。この意義とは、彫刻教室を通して児童が日常生活の中で慣れ親しんでいる石彫作品がこのシンポジウムで制作されている事実を知り得たこと、つまりまちづくりへの理解を深める機会に繋がったことと、シンポジウムに参加している彫刻家が、地域住民（児童や保護者）との交流を通して地域の景観の一部を形成する彫刻作品を制作できることであった。

1. はじめに

家庭と地域、そして学校が一体となった「総合的な学習の時間」の重要性が謳われて久しい現在、「学社協働」や「学校支援ボランティア」のシステムの構築が求められている。このような課題の背景として、今年度から実施予定の完全学校週5日制にともなう地域の教育力の充実が急務とされていることが、挙げられるだろう。この完全学校週5日制とは、「学校、家庭、地域社会が一体となってそれぞれの教育機能を発揮する中で、子どもたちが自然体験や社会体験などを行う場や機会を増やし、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性、健康や体力などの「生きる力」をはぐくもうとするもの」¹⁾ あるから、あくまでも地域の教育力が前提となって実施されていくものである。

しかしながら、この地域の教育力を鑑みてみると、次のような疑念が生じてくる。それは、都市化の進む現在の地域社会において、地域の教育力が機能していくために、個々の住民や各組織が相互に連携しながら学習活動を展開させていくような体制、つまり学社協働²⁾のシステムが整備されているのだろうか、というものである。

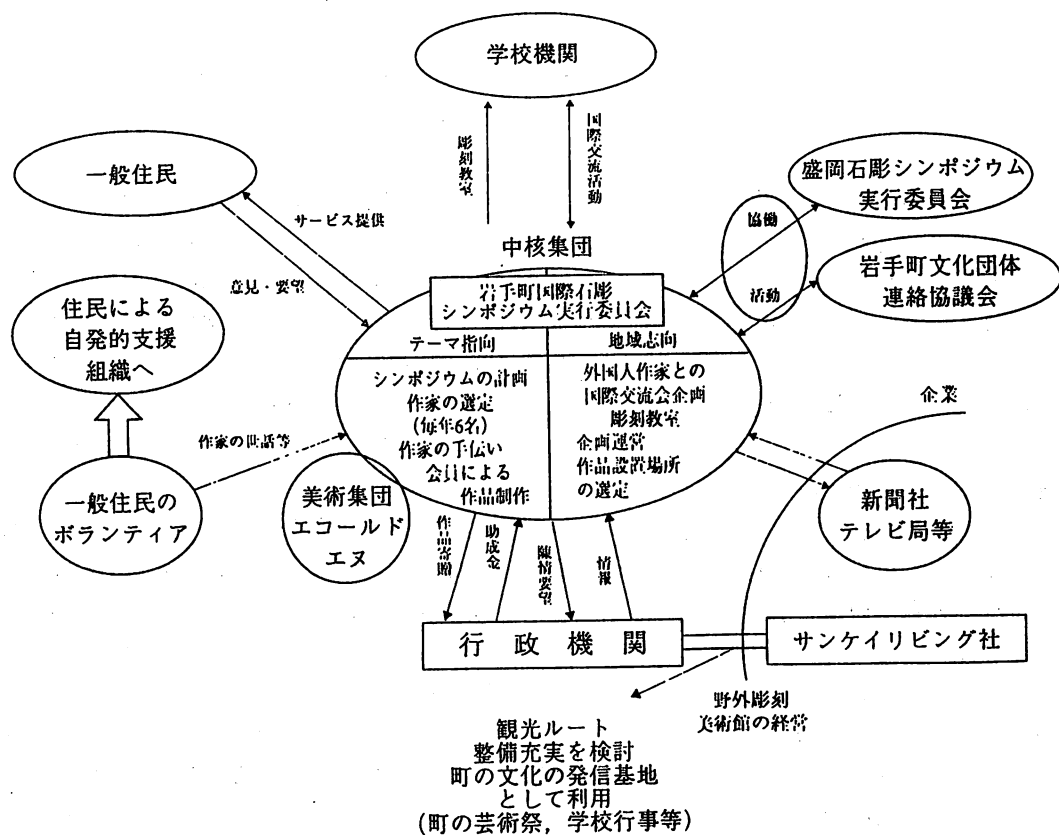
このような課題に対して、文部科学省は、「全国子どもプラン」や「新子どもプラン」等の施策を講じ、地域社会の多様な学習資源を活用した放課後や週末等における子どもの学習活動を促進させるべく、子どもと地域住民との世代間交流活動を支援している。こうした施策は、地域社会における学社協働システムの整備を図ることに直結されているものと考えられる。さらに、地域の学習資源を創造していく地域文化の形成、つまり、まちづくり活動と関連しながら以上のような施策が実施されていくことによって、より一層の効

果を期待できるように思われる。

本研究では、以上の基本認識に立脚しながら、石の彫刻という芸術文化を通じて地域文化の発展をめざしたまちづくり活動（以下、石彫まちづくり）を実施している、岩手県の岩手町国際石彫シンポジウム活動に着目し、2001年8月5日に実施された学社協働事業「彫刻教室」のケーススタディ³⁾より、彫刻教室という学社協働事業が開催された要因を、次の二点の視点から解明することを目的とする。一つには、各主体の彫刻教室への意図を明らかにすることであり、二つには、石彫まちづくりに関するネットワークを明らかにすることである。さらに、学社協働事業である彫刻教室がまちづくりへ与えるインパクトを考察する。

2. 岩手町の石彫まちづくりの概要

岩手町国際石彫シンポジウム（以下、シンポジウム）は、国内外から参加する石彫作家が毎夏50日間にわたる共同生活を送りながら、地元産出の黒御影石を素材とした彫刻作品を制作するものである。1972年より毎年継続されている。この制作過程は一般公開され、完成した作品は地域の至る場所、例えば学校、公民館、町立公園、道路沿い等に設置され、橋の親柱にも彫刻がほどこされている。このように岩手町では、このシンポジウムにおい



第1図：岩手町国際石彫シンポジウムにおけるネットワーク図⁴⁾

て制作された作品が、地域の景観の一部を形成している。

そもそこのシンポジウムは、1957年に、地方から都市への文化発信をめざして結成された市民グループ（名称：エコール・ド・エヌ）が、地域文化の発展とまちづくりのために、独力で始めた活動である。その後紆余曲折を経ながらも、この活動を岩手町との協働事業として実行委員会方式で行うようになったのは、1985年からである。

このシンポジウム実行委員会（以下、実行委員会）を取り巻くネットワークを整理したものが、前頁の第1図である。本稿は、第1図に示したシンポジウム実行委員会と学校機関とのネットワークに着目するものである。この両者の連携によって、毎年次のような事業が実施されている。例えば、図工・美術の授業の一環として行われる陶芸教室（ゲストティーチャーはシンポジウムに参加している彫刻家が務める）、中学校体育館で行われる国際交流活動（外国人彫刻家と中学生の交流）、シンポジウム会場で実施される彫刻教室などがある。

3. 分析結果

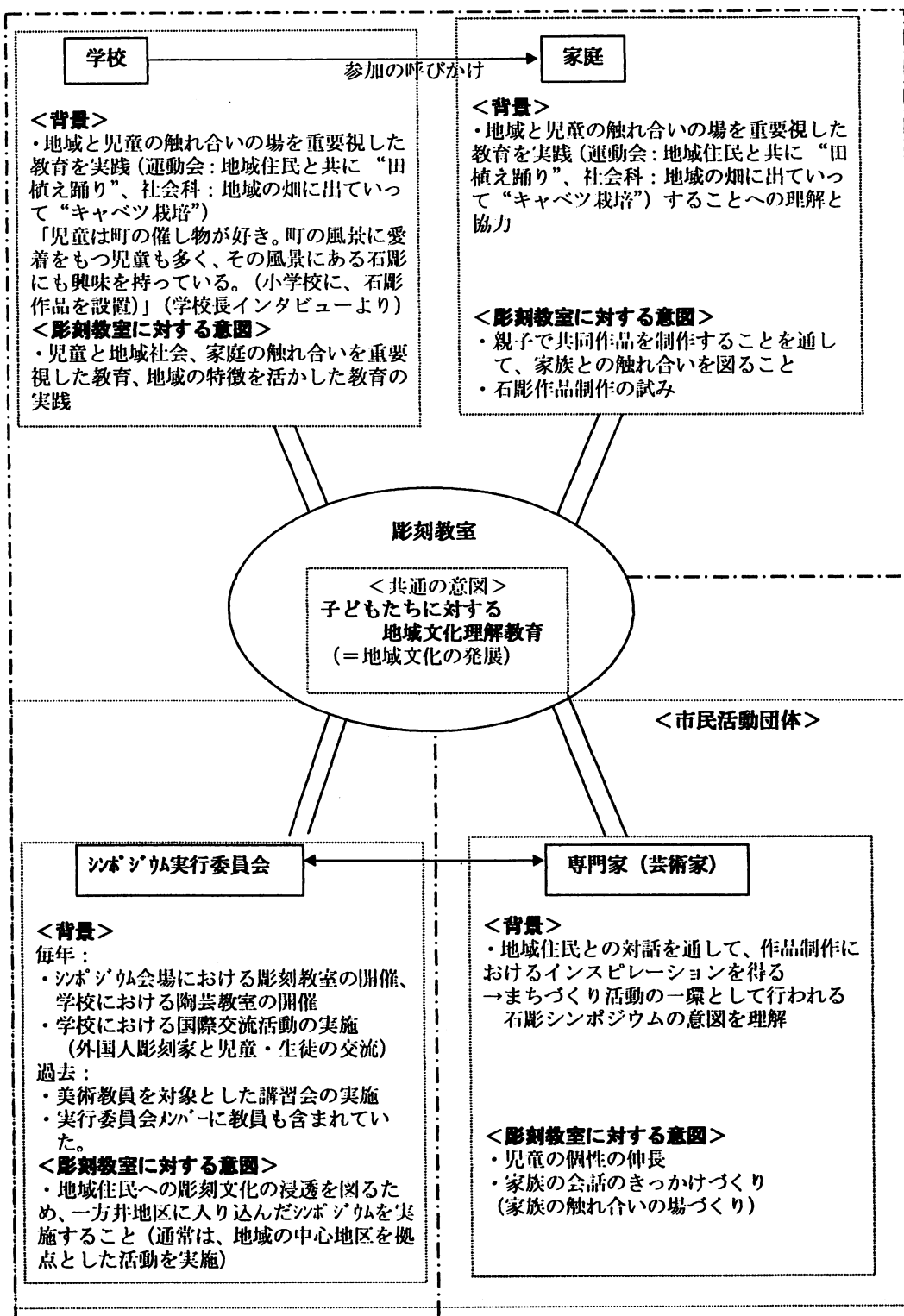
本研究の分析対象となる彫刻教室は、岩手町国際石彫シンポジウム実行委員会と岩手町立一方井小学校の連携のもとに、2001年8月5日（夏季休暇中）に一方井小学校体育館で実施された。参加者は、児童41名（4年生～6年生）、保護者8名、教員5名、彫刻家3名、シンポジウム実行委員会メンバー6名である。

(1)学社協働事業：彫刻教室が実施されるまでのプロセス

彫刻教室は、第2節で述べた通り、シンポジウム開催期間中に小学校の特別行事として学校で開催されたものである。これは、地域住民への石彫文化の浸透、将来の同活動を担っていく市民の育成、という実行委員会側の要望を、学校側が受け入れたから実現したものである。一方、学校側は、日頃から地域社会と児童の触れ合いの場を重要視した教育（例えば、運動会では地域住民や児童に郷土芸能を指導し発表する、社会科の授業では地域の農家に出向いてキャベツ栽培に関する学習を行う）を実践している。この彫刻教室では、児童と地域住民や芸術家との触れ合いを通じて、地域の特徴を活かした教育が実践できることを期待していた。

以上に挙げた実行委員会側と学校側に、家庭（保護者）と専門家（芸術家）を加えた各主体の彫刻教室に対する意図を整理したものが、次頁の第2図である。この第2図に示した専門家（芸術家）というのは、シンポジウムに参加している彫刻家を指している。彫刻家は、前述の通り、この彫刻教室ではゲストティーチャーの役割を担っている。彼らは、他の主体（学校、家庭、実行委員会）と異なる彫刻教室に対する意図を持っていたことに眼を引く。その意図とは、作品制作におけるインスピレーションを地域住民との交流を通して得るというものである。シンポジウムに参加する彫刻家たちは、ただ単に芸術家としてのキャリアアップや作品を創造することを行うだけでなく、そもそもこの活動がまちづくりの一環として始められた背景を理解したうえで、シンポジウムに参加してきている。例えば、まちづくりとシンポジウムの関係について、ある彫刻家は次のように語っている。

「このシンポジウムで創った作品が地域に設置されることを考えると、私たちはこの



第2図：“彫刻教室”開催までのプロセスの模式図

地域でしか創れない作品を創りたいのです。そのためには、地域の風土をよく知って、できれば知るだけではなく共感することが大切だと思っています。そのためには、地域住民ともっともっと対話がしたいのです。そして、そこから得たものを作品に活かしていきたいのですが、実際は作品制作に時間的に追われてしまい、そういう時間をなかなかとることができません。・・・」

このような彫刻家たちにとって、彫刻教室は地域の子どもたちやその保護者（地域住民）と交流を図ることのできる絶好の機会のようなのである。実際に、彫刻家の中には、彫刻教室における子どもたちとの対話の中から作品制作のインスピレーションを得た者もいる。例えば、子どもたちが彫刻教室で制作した作品を、自分の作品の中に融合させて一つの作品を創りあげた者や、子どもたちを観察して彼らの嗜好を観察し、作品が遊び道具になるようなものを制作して校庭に設置した者もいる。

第2図に示した通り、各主体が子どもたちに対する地域文化理解教育を共通の意図としながらも、それぞれの立場から彫刻教室に対する意図を持っていたことが明らかになった。これら4つの主体が各々に持つ意図を活かしながら彫刻教室を遂行するために、事前に学校側と実行委員会側による綿密な意見交換会が実施された。そこで決定された役割分担を整理したものが下記の第1表である。

第1表：彫刻教室の役割分担

主体	役割	備考
学校	会場の提供、父母への参加呼びかけ（説明）、指導サポート	細部の運営
実行委員会	材料の準備（手配）、会場の準備	全体の運営
彫刻家	材料選び、授業計画、児童の指導	技術的指導
保護者	児童のサポート、運営の手伝い	細部の運営

各主体の役割分担が決定した後、実行委員会と彫刻家が学校を訪問して、児童に対して彫刻教室に関する事前説明会を行うことになった。その際、実行委員会が石彫まちづくりの概要について解説し、彫刻家が彫刻刀や鋸等の道具の使用手法や作品の下地作りを指導した。

(2)彫刻教室の模様

彫刻教室は、グループ（保護者と教師を含めた各7名程のグループ）を編成し、グループ毎に作業を進める、という方法で進められた。そして、ゲストティーチャーである彫刻家が、各グループを回りながら一人ひとりに直接助言および指導していた。この彫刻家は、インタビューによると、次のような点に留意しながら指導していたようである。

「学校で行う授業は、どんなに工夫を凝らしても、やはりマニュアル通りになってしまふ。例えば、絵を描く時は画用紙からはみ出して描けるように、自由にやってもらいたい。こういう場（彫刻教室）が、子ども達にとって自由な発想で個性を伸ばすような場になってほしい。今回は学校の先生方も、前もって行われた打ち合わせ（意見交換会）

で我々のやり方で彫刻教室を進めることを理解してくれてサポートしてくれている。」

「今回は子どもたちに最後まであきらめず作品を仕上げて、やり通すことの大切さを知ってくれば良いです。…校長先生をはじめ先生方が非常に協力的だったからやりやすい。子どもたちも日頃から石彫作品に触れているために、興味を持って積極的に取り組んでいる。」

以上のインタビュー録から、彫刻家の指導方針に学校側も理解を示していることが窺える。これは、彫刻教室の準備のための意見交換会が綿密に行われたからこそ、事前に両者の合意形成が図られていたためであると考えられる。なお、この意見交換会で、学校側は彫刻教室ではなく、川原で拾ってきた小石の絵付け教室を提案した。その提案に対して実行委員会側が、岩手町では石彫まちづくりを実施しているので子どもたちが石彫制作に挑戦することを提案した結果、学校側も児童が地域文化を理解することに繋がれば良いという認識に立ち、小石の絵付け教室ではなく、彫刻教室を実施することに合意したのであった。

一方、児童の彫刻教室に対する評価は、下記のアンケート調査⁵⁾の結果より、概ね良好であったことが明らかになった。質問項目は次の通りである。(問1：学年、問2：あなたは石彫シンポジウムについて知っていましたか、問3：あなたは岩手町をどう思いますか、問4：今日の彫刻教室についてどう思いますか、問5：また彫刻教室に参加してみたいですか)

第2表：児童に対するアンケート調査結果

	4年生			5年生			6年生			合計		
問1	6 14.6%			17 41.5%			18 43.9%			41 100.0%		
問2	はい 0	いいえ 6		はい 2	いいえ 15		はい 0	いいえ 18		はい 2	いいえ 39	
学年別	0.0% 100.0%			11.8% 88.2%			0.0% 100.0%			4.9% 95.1%		
問3	とてもすき 4	まあまあ すき 2	あまりすき でない 0	とてもすき 15	まあまあ すき 2	あまりすき でない 0	とてもすき 6	まあまあ すき 10	あまりすき でない 2	とてもすき 25	まあまあ すき 14	あまりすき でない 2
学年別	66.7%	33.3%	0.0%	88.2%	11.8%	0.0%	33.3%	55.6%	11.1%	61.0%	34.1%	4.9%
問4	とても面白 かった 6	まあまあ 面白かった 0	つまらな かった 0	とても面白 かった 17	まあまあ 面白かった 0	つまらな かった 0	とても面白 かった 15	まあまあ 面白かった 3	つまらな かった 0	とても面白 かった 38	まあまあ 面白かった 3	つまらな かった 0
学年別	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	83.3%	16.7%	0.0%	92.7%	7.3%	0.0%
問5	はい 6	いいえ 0		はい 17	いいえ 0		はい 17	いいえ 1		はい 40	いいえ 1	
学年別	100.0%	0.0%		100.0%	0.0%		94.4%	5.6%		97.6%	2.4%	

(単位は人)

問2に着目してみれば、児童の大多数(95.1%)が、「石彫シンポジウムを知らなかった」と回答していることが明らかになった。その一方で、児童に対するインタビュー録によると、「岩手町という石彫が思い浮かぶ。いつかは自分も創ってみたかった。」「石彫は毎日見ているから知っているけど、創り方は知らなかった。」「将来は彫刻家になってみたいと思う。」と回答する児童の存在が各グループの多数確認できたことより、児童の多くは日頃から石彫作品に興味を持ちながら過ごしている。それにも関わらず、児童の大多数は、彫刻作品がどのように制作されているのか、また誰がいつ制作しているのか、といった情報を、ほとんど知らなかったのである。

したがって、子どもたちは、この彫刻教室に参加したことによって、このシンポジウムで自分たちが日頃見慣れ親しんでいる作品が制作されているという事実を知り、それが地域住民によって実施されているまちづくり活動であることを理解する機会を得たことになったのである。

4. 考察

この彫刻教室が学社協働事業として実施されるに至った要因として、次の二点を挙げることができる。

第一点目は、学習資源として、石彫シンポジウムという地域文化の存在があったことである。本研究では、この地域文化を次の二つの視点より捉えている。一つ目は、地域住民が過去から現在までに地域内外のあらゆる人々に触れ合って、その関わりの中で集積された思想である。本研究の事例におけるこの思想とは、「荒廃し続ける文明を救うものは文化であり、その原点を秘めているものは、地方においてもはや他にない」というシンポジウムの活動理念である。つまり、地方から中央（都市）への文化発信を目指す思想である。二つ目は、上述の一つ目における地域文化（地域住民の思想）によって創出された具体的な産物である。例えば、地域住民の抱いている思想（活動理念）から発生し、それが具現化した「まちづくり活動」という形態も一つの地域文化といえることができる。また、本研究の場合は、シンポジウムによって制作された「作品」、その作品が設置された「景観⁶⁾」、この活動のなかで実施されている多様な「学習機会」等を、二つ目の意味における文化だと位置付けられる。

このような地域文化とは、彫刻教室に寄せる各主体（学校、実行委員会、保護者、彫刻家）の共通の目的が、「子どもたちが地域文化を理解すること」であったことから、多くの地域住民に受け入れられやすいもの、つまり公共性の高いものであることが窺える。この岩手町の場合は、「石彫まちづくり」という地域文化が学社協働事業（彫刻教室）を実施する際、学習資源としてこの地域に存在していたのである。この彫刻教室に参加した児童は石彫という地域文化に日頃から親しんでいたものの、それを制作するシンポジウム活動やその活動理念を知らなかった者が大多数であった。そのような児童にとって、この彫刻教室が、石彫作品とまちづくり活動（シンポジウム）の繋がりを認識する、つまり地域文化理解のための機会になったのである。

第二点目は、石彫まちづくりを基軸としたネットワーク、つまり学社協働のシステムが整備されていたことによって、学校側とまちづくり活動団体側の合意形成が図られる仕組みが形成されていたことである。そもそもこの事例のまちづくり活動団体と学校のネットワークが形成されたのは、1978年である。その当初の活動は、現在のように両者が協働事業を行うものではなく、せいぜいまちづくり活動団体側と学校の美術教師間で行われる美術講習会であった。それ以後現在までの間に培われた両者のネットワークは、学校長やまちづくり活動のメンバーが入れ替わったとしても保持されてきている。

以上の知見を踏まえると、この彫刻教室がまちづくりに及ぼした影響とは、次の二点である。一つには、地域の子どもたちが、日常生活の中で慣れ親しんでいる石彫作品がシンポジウムで制作されていることを理解する機会を得たことである。二つには、従来から形成されていた学校と実行委員会間のネットワークが、両者の協働で実施した彫刻教室を通

して今後も保持されていくことである。それによって、今後もまちづくりを実施していく過程で、実行委員会側は学校側と意思の疎通を図りやすい状況を築いていくことができる。

一方、シンポジウムに参加している彫刻家側の視点からこの彫刻教室を捉えてみると次の通りである。彫刻教室は石彫まちづくりの一環として実施されたものであるが、彼ら彫刻家にとって、この場が地域の子どもたちが興味を抱くような作品を制作するためのインスピレーションを得る絶好の機会であったことが明らかになった。例えば、シンポジウムに参加する彫刻家の中には、石彫まちづくりに関する学社協働事業(彫刻教室や陶芸教室、外国人彫刻家と児童および生徒の国際交流会等)で地域の子どもたちと対話することによって、彼らの希望に応えた作品(遊び道具にもなり得るもの)を制作する者や、子どもたちの制作した作品を自分自身の作品に融合させたものを完成させた者もいる。こうして彫刻家が地域の子どもたちとの交流を通して得たインスピレーションを手掛かりとして創られた作品が、地域の景観の一部を形成することによって、子どもたちの地域に対する愛着度がますます高まるものと考えられる。

したがって、この彫刻教室は石彫まちづくりの一環として実施されたものである一方で、そこでの様々な経験がまちづくりに還元されていることが確認されたのである。

注記・引用文献

- 1) 文部科学省生涯学習政策局「今年度の生涯学習政策局の重要施策と課題」(『教育委員会月報』630、pp.23-30) p.24
- 2) 佐藤(2001)の定義によれば、学社協働の「形態」を示すものが学社融合である。この学社協働とは、家庭と学校・地域が目標を共有化し、その達成をはかるために、協働体系の中で各主体が対等な関係性と明確な役割分担を前提としながら相互に物的・人的・社会的システムを活用していく活動のこと(白石克己・佐藤晴雄・田中雅文編『学校と地域でつくる学びの未来』ぎょうせい、2001、p.14-25)である。つまり、学社融合とは、単に学校に対して家庭や地域が支援するような関係性ではなく、家庭・学校・地域が「共通の目標」を達成させるために、それぞれが一丸となって活動に取り組み、その結果もそれぞれにとって分かち合うことのできる活動のことを指すものと解釈できる。
- 3) インタビュー調査(対象者：一方井小学校の児童、教師、学校長、保護者、シンポジウム実行委員会メンバー、彫刻家)と、シンポジウム活動に関連する資料収集を行った。
- 4) 第1図は、東京都政策報道室『行政と民間非営利団体(NPO)』東京都、1996、p.94の「ネットワーク図(例)」を参照にしながら作成したものである。
- 5) アンケート調査は、彫刻教室の閉会式の際に、5分間の時間をいただいて実施したものである。
- 6) 地域の景観について、端は「景観こそは過去からの人々の営みの集積そのものであり、それ自体が誰の目にも見える地域の文化財であるといえる」と述べている。(端信行「地域文化の存在」(『都道府県月報』全国知事会、2001、pp.7-10) p.8